
セルロイド

R I O t

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セルロイド

【Nコード】

N7167C

【作者名】

RIO t

【あらすじ】

超短編（sudden fiction）です。とすると本編を読んだほうが速いと思うので、本編を読むことをオススメします。

木々を黄色く照らしていたライトが制服のワイシャツを照らし出した。ワイシャツは雨で濡れていて、黒い髪が一筋、頬に貼りついていた。私は思いっきりブレーキを踏み、ハンドルを切りさえもした。ローギアに変転する音が心臓の鼓動と同時に鳴り響いた。

「ここにいたのか」

「もうほつといてください」

「そうはいかない、車に乗ってくれ」

車は走り出した。グレーの車体が街灯の光を潜り抜けていった。私の気持ちは落ち着かなかった。助手席の彼女は雨と汗で濡れたシャツは彼女の体にまわりついていて、頬は赤く、息も荒かった。そしてじつと道路の向こうを見つめながら、黙っているばかりだった。

立ち込める雲が海岸線を覆い、雨は止む様子がなかった。窓を開けると、突き刺すような風が車内に入り込んだ。煙草の吸殻を捨てた私はすぐに窓を閉めた。

「今度はどこのホテルに行くんですか？」ありとあらゆる感情も込めずに、彼女は言った。

「いや、だからそれは……」さきほどまで貯め続けていた言葉が急にどこかに飛んで言ってしまい、後にどんな言葉も続けることが出来なかった。もはや頭は磨り減っていて、何も考えようとしていなかった。次第に車は駅前の国道付近までやってきた。国道に入るとコンビニやファミレスの不吉で白い蛍光灯の明かりが目には焼きつくように通り過ぎた。

「あそこにあるデニーズに入ろうか。お腹は空いてる？」

彼女は口を開かなかった。私がもう一度聞いたとき、

「空いていません」彼女は目を合わせずにこう言った

結局、デニーズで彼女は何も注文しなかった。彼女の目の前にあ

るグラスは水滴がびっしりとついたままで、触れられることもなかった。私が食事をしている間中、彼女は窓の外にある暗闇をじっと見つめていた。私も別段お腹が空いているわけではなかったが、なんとか注文したもののすべてを食べ切った。食べ切って私は背もたれに寄り掛かり、煙草に火をつけた。睡魔がやってきて体がだるく感じた。それでも彼女は頑なに外を見つめ続けていた。我慢しきれずに私が話しかけようとしたところで、急に彼女が囁いた。

「どうしてみんな私のことを騙しては去っていくの？私に何をしてくれたの？みんなひどい人ばかり、ひどいことを言って、ひどいことをして……」

彼女は窓際に持たれかけ、少し俯いた。頬には涙が流れていた。それは乾ききらない、シャツの胸の部分に落ちていった。いつもの様子はもう見られなかった。たぶんもう永遠と見ることはないのだろう。それでも現実という感覚はなかった。目の前の風景が急に色褪せて、次第に色を失い、崩れ落ちてしまふ錯覚に陥った。彼女の痛々しい言葉になすすべはなかった。もう何もしてあげることが出来ないのに、その場を去ることもついぞ出来なかった。

しばらくすると彼女は静かに眠っていた。その顔だけは苦しみから絶縁されていた。私はテーブルに5千円札を置き、外へ出た。午前三時を過ぎたところで雨は上がっていた。

（後書き）

感想を気軽に寄せいただけると嬉しいです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7167c/>

セルロイド

2010年12月27日04時56分発行